

所蔵オリンピックポスターについて（前篇）

徳永祐樹

はじめに

2020年3月17日から6月7日にかけて、当館1階エントランスロビーにおいて小企画展「亀倉、ウォーホル、リクテンスタイン…現代美術のアスリートたち——所蔵オリンピックポスターによる」を開催した*1。所蔵するオリンピックポスターに加え、市内所蔵者から1964年東京大会の公式ポスター4種を借用し、合計50点余りを展示替えを挟んで3期にわたって紹介した。

同時代の名だたる作家の手がけるオリンピックポスターは、国内外の戦後の現代美術をコレクションの1つの柱とする当館にとって、開館当初から収集の対象となっていた。早くも開館前、建設準備室時代の1983年に、1972年ミュンヘン大会のアートポスター18点と、1984年ロサンゼルス大会アートポスター15点を収蔵*2。開館した1984年には、1984年サラエボ大会アートポスター18点を収蔵*3。その年、小企画展「オリンピックポスター展」を開催し、これら3大会のポスターを一挙に展示している*4。しかし、1988年に1988年ソウル大会カルチャーポスター12点を収蔵したことを最後に、オリンピックポスターの収集は打ち切られている*5。以降は、常設展の一部として限られた点数で展示される機会があった。それゆえ今回の展示は1984年以来初めて網羅的にポスターを紹介する機会となった。

展示にあたり、鑑賞ガイドと全作品の解説パネルを作

成。これまで把握してこなかったオリンピックポスターの概要や各作品の図像やデザインの由来等を調査することとなった。本稿は成果報告の前篇として、ミュンヘン大会、ロサンゼルス大会について論じる。すべての作家のカタログレゾネに当たることができなかつたため、個々の作品のデータや図像の由来等を調査することは時に困難を極めた。そのため、ポスターを所蔵する他館の作品データや、画廊、オークション等において取引される際のデータ等は、どんな些細なものでも役立った。しかし、所蔵館やオークション会社によってタイトルが異なる場合もあったため、本稿における情報は暫定的なものである。また、今回展示できなかつたポスターもあり、作品により情報量にも多寡が出てしまった。それらの作品の調査と、サラエボ大会、ソウル大会の調査報告は後篇の課題としたい。

調査にあたっては、2008年にヴィクトリア&アルバート博物館で開催された展覧会「A Century of Olympic Posters」の図録*6、1992年にロサンゼルスのアマチュア・アスレチック財団 (Amateur Athletic Foundation of Los Angeles、2007年にLA84財団に改称) が主催した展覧会「Art and Sport: Images to Herald the Olympic Games」の図録*7が参考となった。また、LA84財団によってデジタル化された各大会の「Official Report」を始めとするオリンピック関連の書籍や雑誌記事、ローザンヌのオリンピック・スタディーズ・センター刊行の資料等が役に立った*8。

*1 『令和元年度いわき市立美術館年報』 いわき市立美術館、2020年、36-38頁。

*2 『いわき市立美術館所蔵作品図録』 いわき市立美術館、1984年、206-218頁。

*3 『昭和59年度いわき市立美術館年報』 いわき市立美術館、1985年、69-70頁。

*4 『昭和59年度いわき市立美術館年報』 いわき市立美術館、1985年、42-43頁。

*5 『昭和63年度いわき市立美術館年報』 いわき市立美術館、1989年、55-56頁。

*6 Margaret Timmers, *A Century of Olympic Posters* (London: V&A Publishing, 2008).

*7 Karen R. Goddy and Georgia L. Freedman-Harvey, eds., *Art and Sport: Images to Herald the Olympic Games* (Los Angeles: Amateur Athletic Foundation of Los Angeles, 1992).

*8 The Olympic Studies Centre, ed., *Olympic Summer Games Posters from Athens 1896 to Rio 2016* (Lausanne: The Olympic Studies Centre, 2017); The Olympic Studies Centre, ed., *Olympic Winter Games Posters from Chamonix 1924 to*

オリンピックにおけるポスター制作の背景

ピエール・ド・クーベルタン男爵の尽力によって1896年に第1回アテネ大会が開催された近代オリンピック。情報通信技術の誕生以前、黎明期の近代オリンピックにとって、ポスターは大会の情報を世界中に伝えるために欠かすことのできない、最も効果的な手段であった^{*9}。しかし、情報通信技術が発達してからもなお、オリンピックを機に多くのポスターが制作され、話題を集めている。いかにして「オリンピックポスター」制作という文化は定着したのだろうか？

近代オリンピックの誕生以降20世紀前半まで、大会の組織委員会が公式に制作するポスターは1点か2点であった。その慣習に変化をもたらしたのが、1964年東京大会である^{*10}。大会の組織委員会は、1960年、デザイナーと評論家による「デザイン懇談会」を発足させ、大会公式エンブレム決定のために日本を代表するデザイナーたちによる指名コンペを行った。提出されたデザイン案の中から、戦後日本のデザイン界を牽引したデザイナー、亀倉雄策によるエンブレムが満場一致で採用された。日の丸と五輪シンボルを組み合わせたデザインは世界的にも高く評価され、注目を集めることとなった。エンブレムが決まると、大会の公式ポスターも亀倉がデザインすることになる。1号ポスターはエンブレムをそのままB1サイズ（縦103cm）まで拡大し、横幅をカットしたイレギュラーなサイズとなった。その後、公式ポスターは2号、3号とシリーズ化され、最終的に4号まで制作されることとなった^{*11}。

東京大会によってデザイン性、芸術性の高いポスターという可能性の先鞭をつけられたオリンピックにおいては、やがて大会の「公式ポスター」として1点のポスターを定めた上で、それとは別に、趣向を凝らしたポスターが制作されるようになる^{*12}。

特に70年代以降、卓越したアーティストやデザイナーに依頼した、シリーズものの「アートポスター」が制作されるようになる。アートポスターは、オリンピックに

おいて重要な文化プログラムとして機能するとともに、「スポーツをテーマとするポスター」という新しい美術ジャンルを生むことにもなった。そして芸術性の高いこれらのポスターは、コレクターや美術館による蒐集の対象となったのである。

また、各競技種目をテーマとする「スポーツポスター」や、開催地の文化を紹介するために制作される「カルチャーポスター」等、ポスターの種類も多彩になってゆき、今日に至る。

ポスターの制作は各大会の組織委員会に委ねられているため、大会により制作背景やその規模、質に違いがある。中でも当館で所蔵するミュンヘン大会、ロサンゼルス大会、サラエボ大会のアートポスターは、オリンピックの歴史において稀に見る豪華なアーティスト陣を迎えたシリーズとして、高く評価されている。以下、各大会のポスターの制作背景や概要を紹介する。

1972年ミュンヘン大会アートポスター 《エディツィオン・オリュンピア1972》

開催中に起こったテロ事件「ミュンヘンオリンピック事件」によって記憶に残ることになってしまったミュンヘン大会。開催地として立候補した段階から、「スポーツとアートの総合」を掲げていたミュンヘン大会の組織委員会にとって、アートポスターの制作は極めて重要な意義を持っていた。1968年6月、組織委員会は、出版社とパートナーシップを結び、ポスターを刊行するための会社「エディツィオン・オリュンピア1972 (Edition Olympia 1972)」を設立する。会社名をシリーズのタイトルとしたアートポスターの制作が、ヴィクトル・ヴァザルリ、デイヴィッド・ホックニーら、当時を代表するアーティストに依頼された^{*13}。

ポスターは、1シリーズを7点ずつとして、5シリーズ計35点が制作され、69年から72年にかけて刊行された。当館では、そのうち18点を所蔵しており、うち4点は2枚ずつ所蔵している^{*14}。市場のコレクターの購買意

PyeongChang 2018 (Lausanne: The Olympic Studies Centre, 2018).

^{*9} Timmers, *A Century of Olympic Posters*, 7.

^{*10} Ibid., 72.

^{*11} 東京国立近代美術館編 『東京オリンピック1964 デザインプロジェクト』 東京国立近代美術館、2013年。

^{*12} Timmers, *A Century of Olympic Posters*, 8.

^{*13} Timmers, *A Century of Olympic Posters*, 81–83; *Die Spiele: The Official Report of the Organizing Committee for the Games of the XXth Olympiad Munich 1972*, vol. 1: *The Organization* (Munich: Pro Sport München, 1974), 257–258.

^{*14} 当館で所蔵していない17点を手がけた作家を以下に列挙する。シャルル・ラピック (Charles Lapicque)、ヤン・レニツァ (Jan Lenica)、エドゥアルド・チリーダ (Eduardo Chillida)、ピエロ・ドラツィオ (Piero Dorazio)、オトマール・アルト (Otmar

欲を刺激するため、ポスターには3段階、いわば「松竹梅」のグレードが設けられた。アーティストのサイン入りで高品質の紙に刷られる200枚限定の「松」、やや品質を落とした紙に4,000枚を超えない枚数で刷られる「竹」、そしてより安価な紙に無制限に刷られる「梅」である。当館で所蔵するポスターは、唯一「竹」グレードのフリーデンスライヒ・フンデルトワッサーの1点を除いて、すべて「梅」グレードである。フンデルトワッサーのポスターについては作家のカタログレゾネに制作経緯の詳細が記述されており、ミュンヘン大会のポスター制作背景の一端を垣間見ることができる^{*15}。

ポスターは大学、学校、美術館、画廊、大使館、観光施設、文化施設等に展示され、人々の興味関心を惹きつけた。35人ものアーティストによって制作されたこの豪華なシリーズは、オリンピックにおけるアートポスター制作の先鞭をつけたと言えるだろう。

1984年ロサンゼルス大会アートポスター

国際的なテロリズムの蔓延や政治的対立の中、ロサンゼルスは唯一の開催立候補地だった。共産主義諸国のボイコットがあったものの、アメリカの陸上選手、カール・ルイスの4つの金メダル獲得など、大会は大いに盛り上がりを見せた。また、大会委員長となった実業家ピーター・ユベロスが手腕を発揮し、商業的にも成功を取めたため、以降のオリンピックの商業化のきっかけとなった大会と位置付けられる。

大会組織委員会は、1984年6月1日から8月12日までの10週間という長期間にわたり、オリンピック芸術祭 (Olympic Arts Festival) を開催した^{*16}。演劇、オペラ、ダンスといった上演芸術と並んで、美術分野においても

Alt)、マックス・ビル (Max Bill)、トム・ウェッセルマン (Tom Wesselmann)、ヴァレリオ・アダミ (Valerio Adami)、アラン・デイヴィ (Alan Davie)、リチャード・スミス (Richard Smith)、ゲルノート・ブーベニック (Gernot Bubenik)、ギュンター・デッシュ (Günter Desch)、アルフォンソ・ヒュッピ (Alfonso Hüppi)、クラインハムス (Kleinhammes)、ヴェルナー・ネーファー (Werner Nöfer)、ヴォルフガング・ペトリック (Wolfgang Petrick)、ゲルト・ヴィナー (Gerd Winner)。Timmers, *A Century of Olympic Posters*, 138.

^{*15} Andrea Christa Fürst, *Hundertwasser 1928–2000: Werkverzeichnis/Catalogue Raisonné*, vol. 2 (Cologne: Taschen, 2002), 831–834.

^{*16} *Official Report of the Games of the XXIIIrd Olympiad, Los Angeles, 1984*, vol. 1: *Organization and Planning* (Los Angeles: Los Angeles Olympic Organizing Committee, 1985), 528.

展覧会と作品の制作依頼が企画された。組織委員会は早くも1981年に大会会場の位置する南カリフォルニアの博物館・美術館に芸術祭への参加を打診。各会場で催された展覧会は、1936年のロサンゼルスオリンピックに関するものから、古代ギリシャ工芸、近代フランスの印象派に至るまで多岐に渡った。そして作品の制作依頼の企画として最たるものが、アートポスターであった。芸術祭のディレクターに加え、ロサンゼルス現代美術館、ロサンゼルス・カウンティ美術館の専門家の作家選定にあたり、世界的に活躍するスターから若く新しい才能まで、アメリカ西海岸を拠点とするアーティストによる15点のアートポスターが制作され、1983年1月11日にロサンゼルス市立美術館で発表された^{*17}。

それぞれ、アーティストのサイン入り限定版750枚と、販売用の廉価版ポスターが多量に生産された^{*18}。うち6点が、横長の向きという点で特徴的である。当館は廉価版で全15点を所蔵している。

おわりに

スポーツの祭典としてだけではなく、文化・芸術の祭典としての役割も果たすことを求められた近代オリンピックの歴史の中で、ポスターは情報伝達の手段という元来の機能を超えて、欠かすことのできない重要な文化プログラムに成長した。とりわけ、1972年ミュンヘン大会と1984年ロサンゼルス大会は、名だたるアーティストを迎え、作品にグレードを設け豪華な限定部数版を制作し、ポスターを芸術の領域に高めたという点で、オリンピックポスターの歴史において重要な大会であったと言えるだろう。その路線は1984年サラエボ冬季オリンピックに継承されることとなる。また、1988年ソウル大会では「カルチャーポスター」が制作されるなど、「芸術」としてだけではないオリンピックポスターのバリエーションが展開していく。

後篇ではサラエボ大会とソウル大会ポスターを紹介する。

(とくながゆうき いわき市立美術館学芸員)

^{*17} Ibid., 534.

^{*18} Goddy and Freedman-Harvey, *Art and Sport*, 39.

所蔵オリンピックポスター一覧（前篇）

取蔵番号	作家名	作品名	技法	サイズ(cm)	刊行年
1972年ミュンヘン大会アートポスター《エディツィオン・オリュンピア1972》/ Munich 1972, Art Posters, Edition Olympia 1972					
1983-024	フリーデンスライヒ・ フンデルトワッサー Friedensreich Hundertwasser	《1972年ミュンヘンオリンピック競技大会》 <i>Olympische Spiele München 1972</i>	セリグラフ、メタル プリント・紙 serigraph, metal im- print on paper	102.5 x 64.0	1972年
<p>1928年オーストリア、ウィーン出身の画家、版画家。グスタフ・クリムトに代表されるウィーンのアール・ヌーヴォーの装飾性を受け継ぎつつ、渦巻きや曲線を多用したサイケデリックな強烈なイメージ世界を作り上げた。日本の版画技術にも関心を持ち、姓を和訳した「百水」、名を和訳した「豊和」の落款を作品に入れることもあった。1989年には回顧展が国内を巡回（当館を含む）^{*1}。2000年没。</p> <p>本ポスターは、作家の過去作《世紀の一戦（<i>Das Match des Jahrhunderts</i>）》（油彩・板、1951年）を元にしてしている^{*2}。元作品はウエンブリー・スタジアムで開催されたオーストリア対イングランドのサッカーの試合を題材にしているが、オリンピックに際して新たな要素が付加され、版画作品が制作された。新しい要素として、画面中央の玉葱型ドームをいただく建物がある。これは、ロシアからミュンヘンに移住したティモフェイ・プロホロフなる人物とその妻が、自力で建造した教会である。作家は数回この人物と教会を訪ねている。その場所はミュンヘンオリンピックに際して一度は会場建設地になったものの、市民とマスコミの訴えにより、立ち退きと取り壊しを免れたのである。</p> <p>まず1971年に200部限定のオリジナル版「松」グレードとして、シェラー社の高品質紙に21色刷りシルクスクリーン、5色のメタルエンボス、ベルベット静電植毛で制作された。続いて1972年に、3,999部の「竹」グレードが、21色刷りシルクスクリーン、5色のメタルエンボスで生産された。当館では「竹」グレードのEd. 3762/3999を所蔵している。所蔵ポスターの中では他大会のポスターと合わせても唯一の限定部数版であり、オリンピックポスターの高い芸術性と、制作の背景を伝える重要な一点である。</p> <p>^{*1} 本間正義監修 『フンデルトワッサー展』 美術館連絡協議会・読売新聞社、1989年。 ^{*2} Andrea Christa Fürst, <i>Hundertwasser 1928–2000: Werkverzeichnis/Catalogue Raisonné</i>, vol. 2, Cologne: Taschen, 2002, 831–834.</p>					
1983-028	ジョセフ・アルバース Josef Albers	《1972年ミュンヘンオリンピック競技大会》 <i>Olympische Spiele München 1972</i>	オフセット・紙 offset on paper	101.0 x 64.0	1971年
<p>1888年ドイツ、ポットロップ出身の画家、デザイナー、教師、理論家。1913–15年ベルリン王立芸術学校で学んだ後、20年、芸術学校バウハウス（ヴァイマル）に入学。25年、デッサウに移転したバウハウスで教授となり、ガラス工芸、家具デザイン、タイポグラフィなど多岐にわたる分野で指導にあたった。33年、ナチスによってバウハウスが閉校を余儀なくされるとアメリカに亡命。様々な大学で教鞭を執るとともに著作を残し、幅広い世代の芸術家たちに影響を与えた。1976年没。本作は、1949年から制作を始めた《正方形へのオマージュ》シリーズに共通する様式^{*1}。少ない色彩の組み合わせのみで画面奥に広がる空間を暗示する手法は、ルネサンス期の理論家アルベルティ以来の「窓としての絵画」の本質を明らかにしている。</p> <p>^{*1} “Josef Albers,” The Guggenheim Museum and Foundation, accessed January 15, 2021, https://www.guggenheim.org/artwork/artist/josef-albers.</p>					

収蔵番号	作家名	作品名	技法	サイズ(cm)	刊行年
1983-029	ホルスト・アンテス Horst Antes	《1972年ミュンヘンオリンピック競技大会》 <i>Olympische Spiele München 1972</i>	オフセット・紙 offset on paper	101.0 x 64.0	1970年
<p>1936年ドイツ、ハッペンハイム出身の画家、彫刻家。1957-59年、カールスルーエ国立美術アカデミーで、木版画家H・A・P・グリースハーバーに学ぶ。当初、具象芸術とアンフォルメル芸術（とりわけウィレム・デ・クーニングに傾倒）を股にかけて制作していたが、60年代初期にトレードマークとなる「頭足人」（頭の下から首や胴体なしで脚が生えた人物像）を描き始める。キュビズムやアフリカ彫刻の造形を取り入れつつ、シュルレアリスティックな表現を創り出した。62年、フィレンツェのヴィラ・ロマーナ賞、63年、ローマのヴィラ・マッシモ賞を受賞。カールスルーエのアカデミーで67-73年、84-2000年にかけて教鞭をとった。90年代以降はカールスルーエ、フィレンツェ、ベルリンを拠点に活動している。当館でも作品を取蔵している。本作でもお馴染みの頭足人を前景に、表彰台とオリンピックカラーで大会の雰囲気の花を添えている。</p>					
1983-030	荒川修作 Shusaku Arakawa	《1972年ミュンヘンオリンピック競技大会》 <i>Olympische Spiele München 1972</i>	オフセット・紙 offset on paper	101.0 x 64.0	1970年
<p>1936年愛知県生まれの美術家。武蔵野美術大学中退。1958年、読売アンデパンダン展初出品。61年渡米し、公私ともにパートナーとなる詩人・美術家マドリン・ギンズ(1941-2014)と共同制作を始める。70年ヴェネチア・ビエンナーレに日本代表として出品。72年、ドイツのマックス・プランク研究所に招待される。97年にはグッゲンハイム美術館（ニューヨーク）で日本人として初めて回顧展が開催された。文字、記号、形、色のグラデーションといった次元の異なる要素を並置した「図式絵画」シリーズや、岐阜県の広大な敷地に建設された公園施設《養老天命反転地》(1995年)など、多岐にわたる活動を展開した。2010年没。本作はオフセット印刷の廉価版だが、200部限定で制作された豪華版では、マイラーと呼ばれる銀色の光沢素材にシルクスクリーンで刷られている*1。画面の下部では、疾走する馬の脚がいかにか動いているかを初めて明らかにした19世紀の写真家、エドワード・マイブリッジによって撮影された連続写真を転用している。</p> <p>*1 北九州市立美術館編 『荒川修作全版画展』 北九州市立美術館、1979年、52-53頁。</p>					
1983-031	アラン・ダーカンジェロ Allan d'Arcangelo	《1972年ミュンヘンオリンピック競技大会》 <i>Olympische Spiele München 1972</i>	オフセット・紙 offset on paper	101.0 x 64.0	1971年
<p>1930年アメリカ、ニューヨーク州バッファロー生まれの画家、版画家。バッファロー大学で歴史学を修めるが、卒業後ニューヨークへ行き絵画を学び始める。57-59年にメキシコ・シティに行き、画家で美術史学者のジョン・ゴールディングのもとで学ぶ。63年にニューヨークで初の個展を開催。車の座席から見たアメリカのハイウェイを、簡略化して平面的に描いたシリーズを発表、ポップアーティストとしての名声を確立する。1998年没。本作では白と黒のストライプの直方体の棒4本、赤と白の棒1本、緑色の輪が、空間の中で交わっている様子が、平面化され、省略された形式で描かれている。これはダーカンジェロが、1965年頃から取り組んでいた、ハイウェイシリーズよりさらに抽象的な作風を反映している*1。</p> <p>*1 Linda Konheim Kramer, "The Prints of Allan D'Arcangelo," <i>Art in Print</i> 5, no. 1 (2015): 3-6.</p>					

取蔵番号	作家名	作品名	技法	サイズ(cm)	刊行年
1983-032	アンス・アルトゥング Hans Hartung	《1972年ミュンヘンオリンピック競技大会》 <i>Olympische Spiele München 1972</i>	オフセット・紙 offset on paper	101.0 x 64.0	1969-70年
<p>1904年ドイツ、ライプツィヒ生まれの画家。ライプツィヒ大学で哲学と美術史を学び、特に「抽象絵画の父」、ヴァシリー・カンディンスキーの講義を受け、抽象絵画に傾倒した。第二次世界大戦でフランス軍外人部隊に勤務、戦後フランスに帰化する。「身振り」の痕跡を留めるアクション・ペインティングの作風で知られ、のちのアンフォルメル芸術（「非定形芸術」の意）に影響を与えた。1989年没。本作には、刷毛、ローラー、ほうきなど、多様な道具を用いるようになった60年代以降の画家のダイナミックな作風が反映されている*¹。</p> <p>*¹ ジャン・フランソワ・パユほか 『ポスター、リトグラフに見るオリンピック・アート展』 読売新聞社、1997年、7頁。</p>					
1983-033	デイヴィッド・ホックニー David Hockney	《1972年ミュンヘンオリンピック競技大会》 <i>Olympische Spiele München 1972</i>	グラビア・紙 rotogravure on paper	101.0 x 64.0	1971年
<p>1937年イギリスのブラッドフォード生まれの画家、版画家、写真家、舞台美術家。59年から62年まで、ロンドンのロイヤル・カレッジ・オブ・アートで学び、同窓のアレン・ジョーンズ、R・B・キタイらとともにイギリスにおけるポップアートを代表する。64年にロサンゼルスを訪れて以来、カリフォルニアの温暖な気候と開放的な雰囲気の中で、日常の光景や私的な世界を瀟洒に描くスタイルへ転じる。本作では飛び込み選手が水面に着水する瞬間の水面のきらめきが、図式的ではあるが的確に捉えられている。スイミングプールは作家が好んで描いたモチーフのひとつ*¹。</p> <p>*¹ Margaret Timmers, <i>A Century of Olympic Posters</i>, London: V&A Publishing, 2008, 27; Karen R. Goddy and Georgia L. Freedman-Harvey, eds., <i>Art and Sport: Images to Herald the Olympic Games</i>, Los Angeles: Amateur Athletic Foundation of Los Angeles, 1992, 35.</p>					
1983-034	フリーデンスライヒ・フンデルトワッサー Friedensreich Hundertwasser	《1972年ミュンヘンオリンピック競技大会》 <i>Olympische Spiele München 1972</i>	グラビア・紙 rotogravure on paper	101.0 x 64.0	1972年
<p>取蔵番号1983-024の廉価版。</p>					
1983-035	アレン・ジョーンズ Allen Jones	《1972年ミュンヘンオリンピック競技大会》 <i>Olympische Spiele München 1972</i>	グラビア・紙 rotogravure on paper	101.0 x 64.0	1970年
<p>1937年イギリス、サウサンプトン出身の彫刻家、画家。1955-59年、ホーンジー・カレッジ・オブ・アート（クラウチ・エンド）、59-60年、ロイヤル・カレッジ・オブ・アート（ロンドン）で学び、同窓のデイヴィッド・ホックニーらとともにイギリスにおけるポップアートを牽引した。性的なイメージをモチーフとして、フェティシズムを感じさせるとともに、男女の権力関係を風刺する作風で知られる。物議を醸した代表作《帽子掛け、テーブル、椅子》(1970)は、ボンデー衣装をまとった女性のマネキンに、無理な体勢をさせたり天板をつけるなどして家具として見立てたインスタレーション。本作の描写する対象はアスリートではあるものの、作家の「脚」に対するフェティシズムは健在である*¹。</p> <p>*¹ ジャン・フランソワ・パユほか 『ポスター、リトグラフに見るオリンピック・アート展』 読売新聞社、1997年、7頁。</p>					

取蔵番号	作家名	作品名	技法	サイズ(cm)	刊行年
1983-036	R・B・キタイ R. B. Kitaj	《1972年ミュンヘンオリンピック競技大会》 <i>Olympische Spiele München 1972</i>	オフセット・紙 offset on paper	101.0 x 64.0	1971年
<p>1932年アメリカ、オハイオ州出身の画家、版画家。ユダヤ系の母と継父に育てられ、ウィーン、ニューヨークで芸術を学ぶ。59年イギリスに渡り、ロンドンのロイヤル・カレッジ・オブ・アートに入学、終生の友人となった同窓のデイヴィッド・ホックニーらと共に、イギリスのポップアートを代表した。ポップアートのコラージュ技法と、抽象表現主義のような粗い筆致を融合した鮮やかな様式で、文学、芸術、政治やユダヤ系の出自への参照を多分に含んだ知的な作品で知られる。2007年没。本作では3色で表された水面から頭と腕のみを出した水泳選手が、肌理の粗いタッチで刷られている*1。</p> <p>*1 ジャン・フランソワ・パユほか 『ポスター、リトグラフに見るオリンピック・アート展』 読売新聞社、1997年、7頁。</p>					
1983-037	オスカー・ココシュカ Oskar Kokoschka	《1972年ミュンヘンオリンピック競技大会》 <i>Olympische Spiele München 1972</i>	オフセット・紙 offset on paper	101.0 x 64.0	1969-70年
<p>1886年オーストリア出身の画家。世紀転換期ウィーンの知的・芸術的環境の中で形成期を過ごし、画家を志す。1909-10年頃、著名な人物をモデルにした「心理的肖像画」で名を馳せ、ベルリンに出て、ドイツ表現主義運動を代表する雑誌『デア・シュトルム』に作品を発表。第一次大戦従軍による負傷、ナチス迫害から逃れるための亡命を乗り越え、肖像画と風景画において表現主義を探究し続けた。1980年没。本作の原画は、『クローロス』と題して画家が制作した版画作品のうちの1つ（レゾネ番号Wingler/Welz 449）*1。クローロスとは、古代ギリシャ・アルカイック期の彫刻における男性裸体立像のこと。</p> <p>*1 土方定一ほか編 『オスカー・ココシュカ展』 東京新聞、1978年。Hans M. Wingler and Friedrich Welz, eds., <i>O. Kokoschka: das druckgraphische Werk</i>, 2 vols., Salzburg: Verlag Galerie Welz, 1975-1981.</p>					
1983-038	ジェイコブ・ローレンス Jacob Lawrence	《1972年ミュンヘンオリンピック競技大会》 <i>Olympische Spiele München 1972</i>	オフセット・紙 offset on paper	101.0 x 64.0	1972年
<p>20世紀を代表するアフリカ系アメリカ人画家の一人。1917年ニュージャージー州アトランティック・シティに生まれ、13歳の時、家族とニューヨーク、ハーレム地区へ移住。1920年代、30年代に起こったアフリカ系アメリカ人のアイデンティティを啓発する芸術文化運動「ハーレム・ルネサンス」の只中で育ち、画家を志す。23歳の時に手がけた代表作《マイグレーション・シリーズ》(40-41年)は、20世紀前半に、作家の両親を含む100万人以上のアフリカ系アメリカ人が、差別・迫害を逃れてアメリカ南部から北部へ大移住した「グレート・マイグレーション」を主題として、つましい黒人の生活を綴った60点の絵画からなる連作。後年はワシントン大学で教鞭を執った*1。2000年没。本作では、1936年ベルリン大会で短距離・跳躍種目で4冠を達成した陸上選手ジェシー・オーエンスをモチーフとして、スポーツにおける黒人選手の活躍を鮮やかな色彩で讃えている*2。</p> <p>*1 “Jacob Lawrence: The Migration Series,” The Phillips Collection. accessed January 15, 2021, https://lawrencemigration.phillipscollection.org.</p> <p>*2 “Olympic Games Munich 1972 (Olympische Spiele München 1972),” Philadelphia Museum of Art, accessed January 15, 2021, https://www.philamuseum.org/collections/permanent/149410.html; Elizabeth Smith, “Object of the Week: Study for the Munich Olympic Games Poster,” <i>Seattle Art Museum, SAMBlog</i>, posted February 16, 2018, http://samblog.seattleartmuseum.org/2018/02/object-week-study-olympic-games/.</p>					

収蔵番号	作家名	作品名	技法	サイズ(cm)	刊行年
1983-039	マリノ・マリーニ Marino Marini	《1972年ミュンヘンオリンピック競技大会》 <i>Olympische Spiele München 1972</i>	オフセット・紙 offset on paper	101.0 x 64.0	1969-70年
<p>1901年イタリア、トスカーナ州出身の彫刻家、画家。アカデミア・ディ・ベッレ・アルティ（フィレンツェ）で絵画や版画を学び、1922年からドメニコ・トレンタコステに彫刻を本格的に学び始める。28年パリに赴き、彫刻家アリスティード・マイヨールと親交を結び、帰国後、彫刻家として活動を始め、古代エトルリア、ローマ、14世紀のトスカーナ彫刻に靈感を受け、裸婦、騎馬像、肖像彫刻を制作した。ジャコモ・マンズー、アルトゥーロ・マルティエーニと共にイタリア現代彫刻を代表した。1980年没^{*1}。本作の、体を垂直に伸ばし両手を水平に広げた騎手と馬は、《馬と騎手》という彫刻シリーズと主題を同じくしている。</p> <p>^{*1} “Marino Marini,” The Guggenheim Museum and Foundation, accessed January 15, 2021, https://www.guggenheim.org/artwork/artist/marino-marini.</p>					
1983-040	ピーター・フィリップス Peter Phillips	《1972年ミュンヘンオリンピック競技大会》 <i>Olympische Spiele München 1972</i>	グラビア・紙 rotogravure on paper	101.0 x 64.0	1972年
<p>1939年イギリス、パーミンガム出身の画家、版画家。59年からロンドンのロイヤル・カレッジ・オブ・アートで学び、同窓のデイヴィッド・ホックニー、アレン・ジョーンズ、R・B・キタイらとともにイギリスにおけるポップアートを代表する。64-66年、奨学金を得てニューヨークで活動、アンディ・ウォーホル、ロイ・リクテンスタイン、ジェームズ・ローゼンクイストら、アメリカのポップアーティストたちと交流した。油彩画からコラージュまで手がけ、現代生活、広告、デザインや、有名なアイコン等から借用したイメージを鮮やかな色彩で提示する作風で知られる。本作は、作家のオフィシャルウェブサイトにおいて“Hurdler”と名付けられている^{*1}。</p> <p>^{*1} “Hurdler, 1972: Olympische Spiele Munchen,” Peter Phillips Official Website, accessed January 15, 2021, http://www.peterphillips.com/hurdler-1972-olympische-spiele-munchen/.</p>					
1983-041	セルジュ・ポリャコフ Serge Poliakoff	《1972年ミュンヘンオリンピック競技大会》 <i>Olympische Spiele München 1972</i>	オフセット・紙 offset on paper	101.0 x 64.0	1969-70年
<p>1900年ロシア、モスクワ生まれの画家。後にフランスに帰化する。1917年ロシア革命から逃れて、ブルガリアに移住。23年パリに定住、29年から絵画を学び始める。35-37年ロンドンにわたり、スレード美術学校でドローネー夫妻、ヴァシリー・カンディンスキーといった画家に学び、抽象絵画に傾倒。37年にパリに戻り、38-45年アンデパンダン展に参加。第二次大戦後ヨーロッパで起こった、アンフォルメル、叙情的抽象、タシスムといった抽象絵画の運動に寄与した。1969年没。本作のための原画は《青と赤と黒のコンポジション》と題され、ジグソーパズルのように組み合わせられた色面の構成は、画家の典型的作風を示している^{*1}。</p> <p>^{*1} “Serge Poliakoff,” The Guggenheim Museum and Foundation, accessed January 15, 2021, https://www.guggenheim.org/artwork/artist/serge-poliakoff.</p>					
1983-042	ピエール・スーラージュ Pierre Soulages	《1972年ミュンヘンオリンピック競技大会》 <i>Olympische Spiele München 1972</i>	オフセット・紙 offset on paper	101.0 x 64.0	1970年
<p>1919年フランス生まれの画家、彫刻家、版画家。アンス・アルトゥング、ジャン・フォートリエらとともに抽象画の発展に貢献した。光を芳醇に含んだ色としての「黒」の表現を追求し続け、79年に自ら「ウートル・ノワール（黒を超える黒）」と名付けた、厚塗りの黒い画面に刷毛などで凹凸をつける作風を確立。100歳を超えてなお活動を続けている。本作は、白い背景に太い黒の描線が描かれたシンプルな構成である。空間を自由に動き回る筆の勢いが、スポーツの躍動感を感じさせる^{*1}。</p> <p>^{*1} ジャン・フランソワ・パユほか 『ポスター、リトグラフに見るオリンピック・アート展』 読売新聞社、1997年、7頁。</p>					

収蔵番号	作家名	作品名	技法	サイズ(cm)	刊行年
1983-043	ヴィクトル・ヴァザルリ Victor Vasarely	《1972年ミュンヘンオリンピック競技大会》 <i>Olympische Spiele München 1972</i>	オフセット・紙 offset on paper	101.0 x 64.0	1970年
<p>1908年ハンガリー出身の画家、版画家。のちにフランスに帰化する。1960年代に欧米で発展した幾何学的抽象画「オブティカル・アート」を先導した。1997年没。本作も幾何学的図形を規則的に反復する作風を貫いているが、ラグビーのスクラムのように、競技において2つの拮抗する力ががちりと組み合った状態を表しているようだ。ヴァザルリは、サラエボ大会、ソウル大会でもアートポスター企画に参加している（当館未収蔵）^{*1}。</p> <p>^{*1} The Olympic Studies Centre, ed., <i>Olympic Summer Games Posters from Athens 1896 to Rio 2016</i>, Lausanne: The Olympic Studies Centre, 2017, 51.</p>					
1983-044	フリッツ・ウィンター Fritz Winter	《1972年ミュンヘンオリンピック競技大会》 <i>Olympische Spiele München 1972</i>	オフセット・紙 offset on paper	101.0 x 64.0	1972年
<p>1905年ドイツ、アルテンバッゲ出身の画家。父と同様に若くして炭鉱で電気技師として働いていたが、25年にベルギーとオランダを旅行した際に美術に傾倒。2年後デッサウのバウハウスに入学し3年間、カンディンスキーやクレーに学ぶ。卒業後、ハレ・アン・デア・ザーレの教育アカデミーで教鞭をとるものの、33年にナチス政権が成立すると辞職し、ミュンヘン、続いてディーセン・アム・アンマーゼーに移住。政権から「退廃芸術」として認定される憂き目にあう。第二次大戦では従軍し、終戦直前に捕虜としてシベリアに抑留される。帰国後はドイツにおける非具象絵画のグループ「Zen 49」に参加。フランスにおける非具象絵画、アンフォルメル、ピエール・スーラージュやアンヌ・アルトウングとも親交を持った。1976年没^{*1}。</p> <p>^{*1} “Fritz Winter,” The Guggenheim Museum and Foundation, accessed January 15, 2021, https://www.guggenheim.org/artwork/artist/fritz-winter.</p>					
1983-045	パウル・ヴンダーリッヒ Paul Wunderlich	《1972年ミュンヘンオリンピック競技大会》 <i>Olympische Spiele München 1972</i>	グラビア・紙 rotogravure on paper	101.0 x 64.0	1972年
<p>1927年ドイツ、ベルリン出身の画家、彫刻家、版画家。ハンブルク造形芸術大学で学び、リトグラフ（版画技法のひとつ）の分野で頭角をあらわす。妻である写真家カリン・シェケシーによる裸婦写真や、過去の西洋絵画をモチーフとして、シュルレアリスム的な奇矯な人体や、解剖学的なエロティシズムに満ちた描写を作風とした。本作の人体を囲む細い紫色の円は、ウィトルウィウスの人体図を思わせるとともに、五輪のシンボルを暗示している。</p>					
1983-046	ジョセフ・アルバーズ Josef Albers	《1972年ミュンヘンオリンピック競技大会》 <i>Olympische Spiele München 1972</i>	オフセット・紙 offset on paper	101.0 x 64.0	1971年
<p>収蔵番号1983-028と同様。</p>					
1983-047	アラン・ダーカンジェロ Allan d’Arcangelo	《1972年ミュンヘンオリンピック競技大会》 <i>Olympische Spiele München 1972</i>	オフセット・紙 offset on paper	101.0 x 64.0	1971年
<p>収蔵番号1983-031と同様。</p>					
1983-048	アレン・ジョーンズ Allen Jones	《1972年ミュンヘンオリンピック競技大会》 <i>Olympische Spiele München 1972</i>	グラビア・紙 rotogravure on paper	101.0 x 64.0	1970年
<p>収蔵番号1983-035と同様。</p>					

取蔵番号	作家名	作品名	技法	サイズ(cm)	刊行年
1984年ロサンゼルス大会アートポスター / Los Angeles 1984, Arts Posters					
1983-219	カルロス・アルマラス Carlos Almaraz	《1984年ロサンゼルスオリンピック競技大会》 <i>Los Angeles 1984 Olympic Games</i>	オフセット・紙 offset on paper	91.5 x 61.5	1982年
<p>1941年メキシコ、メキシコシティ出身のアメリカの画家。幼少期に家族でロサンゼルスに移住する。鮮やかな作風の壁画や絵画で知られ、チカーノ（メキシコ系アメリカ人）としての出自をテーマとして、都市における人々の生活を描き出した。1989年没。本作では、古代ギリシャ様式の円柱、円盤投げの選手、月桂冠等、古代オリンピックを象徴する要素と、ロサンゼルス市の街並み、テレビ等、現代の要素が組み合わされている*¹。</p> <p>*¹ Karen R. Goddy and Georgia L. Freedman-Harvey, eds., <i>Art and Sport: Images to Herald the Olympic Games</i>, Los Angeles: Amateur Athletic Foundation of Los Angeles, 1992, 40.</p>					
1983-220	ジョン・バルデッサリ John Baldessari	《1984年ロサンゼルスオリンピック競技大会》 <i>Los Angeles 1984 Olympic Games</i>	オフセット・紙 offset on paper	91.5 x 61.5	1982年
<p>1931年アメリカ、カリフォルニア州ナショナルシティ出身のコンセプチュアル・アーティスト。サンディエゴ州立大学、カリフォルニア大学バークレー校、ロサンゼルス校で学ぶ。ダダ、シュルレアリスムに影響を受け、60年代からポスターや写真、ポップカルチャーからイメージを転用する「アプロプリエーション」の手法を先駆的に用い始める。70年代に入ると絵画の制作を辞め、《火葬プロジェクト》(70年)では自身の過去の作品のほとんどを焼却する様子を写真に取めるというパフォーマンス作品を制作。ビデオ、写真といった新しいメディアを用い、既存の芸術の定義に収まらない活動を展開、現代美術界に大きな爪痕を残し、2020年没。</p> <p>本作では、現代の陸上選手と、古代ギリシャの壺に絵付けされたアスリートの足を、クローズアップして上下に並べている*¹。オリンピックが古代ギリシャに由来するということを思い出させると同時に、つま先で走るアスリートをデフォルメして描いた古代画家の感性にも驚かされる。作家が写真を用いたのは、メトロポリタン美術館（ニューヨーク）所蔵の古代ギリシャの「アンフォラ（壺）」である*²。「エウピレトスの画家」と呼ばれる名高い画家が、「パンアテナイア祭（全アテナイの祭りの意）」という古代ギリシャの祭典の賞品として紀元前530年頃に制作した。毎年1回、さらには4年に1回大規模に開かれるこの祭典では、音楽、陸上競技、パンクラチオン（格闘技）といった種目で競技会が催され、競技の勝者にはアンフォラに満たされたオリーブ油が与えられたという。赤い壺の明るい地の上に、黒でシルエットを描き、細部を削って赤い地を見せることで表現する、黒絵式で描かれている。徒競走の絵の反対側には、アテナイの守護神アテナが槍と盾を持つ図像「アテナ・プロマコス」が描かれている。</p> <p>*¹ Margaret Timmers, <i>A Century of Olympic Posters</i>, London: V&A Publishing, 2008, 42. *² "Terracotta Panathenaic prize amphora," Metropolitan Museum of Art, accessed January 15, 2021, https://www.metmuseum.org/art/collection/search/248902.</p>					
1983-221	ジェニファー・バートレット Jennifer Bartlett	《1984年ロサンゼルスオリンピック競技大会》 <i>Los Angeles 1984 Olympic Games</i>	オフセット・紙 offset on paper	91.5 x 61.5	1982年
<p>1941年アメリカ、カリフォルニア州出身の画家、インスタレーション作家。ミルズ・カレッジ（オークランド）、続いてイエール大学芸術・建築学部（ニューヘイブン）で学び、ほど近いニューヨークの最先端のアートシーンに影響を受ける。70年、ニューヨークで初の個展。76年に発表した代表作《ラプソディ》は、エナメル画を描いた1フィート四方のスチールパネル987枚を、47mに及ぶ壁面にグリッド状に並べたインスタレーション作品。コンセプチュアル（概念的）とマテリアル（物質的）、抽象と具象の境界を超越した作風で知られる。本作では、下部の水泳選手と上部の走り高跳び選手（背面跳び以前に主流だったベリーロールというフォームか）が、鮮やかな色彩とモノクロームの色彩で並置されている。</p>					

取蔵番号	作家名	作品名	技法	サイズ(cm)	刊行年
1983-222	リンダ・ベンダリス Lynda Benglis	《1984年ロサンゼルスオリンピック競技大会》 <i>Los Angeles 1984 Olympic Games</i>	オフセット・紙 offset on paper	61.5 x 91.5	1982年
<p>1941年アメリカ、ルイジアナ州出身の彫刻家、ヴィジュアルアーティスト。1964年、ニューカム・カレッジ（ニューオーリンズ）で学士号を取得、その後ブルックリン美術館附属美術学校（ニューヨーク）で学ぶ。60年代後半からラテックスフォーム（発泡ゴム）素材を彫刻に用い、注目を集める。70年代から彼女の彫刻はポリウレタンフォーム、アルミ、ブロンズといった様々な素材へと展開。ミニマリズム、カラーフィールド・ペインティング、抽象表現主義に影響を受けながらも、彫刻の領域を押し広げる作品を制作。また、写真、ビデオ分野においてもセンセーショナルな作品を発表、フェミニズムのアイコンとして男性中心主義的な美術界に一石を投じてきた。本作では五輪シンボルを参照しつつも、シンメトリカルな抽象的畫面を構成している。</p>					
1983-223	ビリー・アル・ベンダストン Billy Al Bengston	《1984年ロサンゼルスオリンピック競技大会》 <i>Los Angeles 1984 Olympic Games</i>	オフセット・紙 offset on paper	91.5 x 61.5	1982年
<p>1934年アメリカ、カンザス州出身の画家。1948年より家族とともにロサンゼルスに移住し、同市やサンフランシスコの様々な学校で美術を学ぶ。オーティス・カレッジ・オブ・アート&デザインでは、リチャード・ディーベンコーンのもとでも学んだ。60年代、ニューヨークを中心とする東海岸のポップアートを再解釈し、南カリフォルニアで発展した「ウェストコースト（西海岸）・ポップアート」を代表する。本作では、夕暮れ時のような鮮やかな背景に、オリンピックを示す五つの輪と開催地を表す「L.A.」のイニシャルが、台座の上に据えられている*1。</p> <p>*1 Karen R. Goddy and Georgia L. Freedman-Harvey, eds., <i>Art and Sport: Images to Herald the Olympic Games</i>, Los Angeles: Amateur Athletic Foundation of Los Angeles, 1992, 39.</p>					
1983-224	ジョナサン・ボロフスキー Jonathan Borofsky	《1984年ロサンゼルスオリンピック競技大会》 <i>Los Angeles 1984 Olympic Games</i>	オフセット・紙 offset on paper	91.5 x 61.5	1982年
<p>1942年アメリカ、マサチューセッツ州ボストン出身の彫刻家、画家。1964年、カーネギーメロン大学（ピッツバーグ）で学士号、66年、イエール大学（ニューヘイブン）で修士号取得。その後ニューヨークで美術家ソル・ルウィット（1928-2007）に出会い影響を受ける。69年に数字を1から紙に書き始め、4年後には1,000,000に到達するという《1から無限へのカウンティング》を实践。初期はコンセプチュアル（概念的）な作品を制作していたが、人型をモチーフにした具象的な作風に転向。世界各地で大規模な彫刻・インスタレーション作品を制作した。76年、カリフォルニア芸術大学の教職に就いたことからロサンゼルスに移住。2006年、カーネギーメロン大学名誉博士。日本では、80年代のセゾンカードのテレビCMにドローイングが用いられたことで有名。本作の右に向かって走る人物は、作家の《ランニングマン》（82年）というパネル作品にも登場。「ランニングマン」は84年、崩壊前のベルリンの壁にも描かれている。また、豆状の点が寄り集まったシルエットで描かれているのは、1980年レークプラシッド大会男子スピードスケートで五冠に輝いたエリック・ハイデンである。作家は、本作の「2779794」のように7桁の数字を作品番号のように振り、カウンティングを実践し続けている*1。</p> <p>*1 ジョナサン・ボロフスキー 「演劇的空間と7桁の分身たち」『美術手帖』582号、25-40頁、1987年7月。</p>					

取蔵番号	作家名	作品名	技法	サイズ(cm)	刊行年
1983-225	リチャード・ディーベン コーン Richard Diebenkorn	《1984年ロサンゼルスオリンピック競技大会》 <i>Los Angeles 1984 Olympic Games</i>	オフセット・紙 offset on paper	61.5 x 91.5	1982年
		1922年アメリカ、オレゴン州出身の画家、版画家。幼少期にサンフランシスコに移り住み、スタンフォード大学などで芸術を学ぶ。はじめ、当時主流であった抽象表現主義に傾倒するが、具象絵画に転向、50年代に西海岸で展開された運動「ベイ・エリア・フィギュラティヴ・スタイル」の代表的作家となる。60年代後半から再び抽象に回帰、アンリ・マティスに着想を得た「オーシャン・パーク」シリーズによって世界的な評価を得た。1993年没。本作の幾何学的で鮮やかな抽象は、「オーシャン・パーク」に通じる表現だが、より多く用いられた曲線が動きのあるリズム感を生んでいる。			
1983-226	サム・フランシス Sam Francis	《1984年ロサンゼルスオリンピック競技大会》 <i>Los Angeles 1984 Olympic Games</i>	オフセット・紙 offset on paper	91.5 x 61.5	1982年
		1923年アメリカ、カリフォルニア出身の画家、版画家、彫刻家。従軍中に患った結核の療養を兼ねて絵を描き始め、大学に戻り美術を専攻する。1952年、批評家ミシェル・タピエの企画した「アンフォルメルの意味するもの」展に出品、アンフォルメル運動に賛同した。1994年没 ^{*1} 。本作は赤い背景に的のように幾何学的図形が配され、紫、黄色、水色、赤といった斑点がその中心をかけて競っているようだ。 ^{*1} "Sam Francis," The Guggenheim Museum and Foundation, accessed January 15, 2021, https://www.guggenheim.org/artwork/artist/sam-francis .			
1983-227	エイプリル・グレイマン、 ジェイム・オジャース April Greiman, Jayme Odgers	《1984年ロサンゼルスオリンピック競技大会》 <i>Los Angeles 1984 Olympic Games</i>	オフセット・紙 offset on paper	91.5 x 61.5	1982年
		エイプリル・グレイマンは1948年アメリカ、ニューヨーク州出身のデザイナー。1970年にカンザスシティ・アート・インスティテュートを卒業。ニューヨーク、ボストンでフリーランスのデザイナーとして活動した後、76年ロサンゼルスに移住し、自身のスタジオを構える。80年代初頭、米・アップル社製コンピューター、マッキントッシュをいち早くデザインツールとして導入。デジタル化に否定的だった当時のデザイン界において、先駆的な役割を果たした。ジェイム・オジャースは1939年アメリカ、モンタナ州出身の写真家、デザイナー。アートセンター・カレッジ・オブ・デザイン（カリフォルニア州パサデナ）を62年に卒業。実験的なフォトコラージュによって、西海岸のデザイン界を牽引した。近年は画家として活動している。グレイマンは76年のロサンゼルス移住後、最初の仕事でオジャースを雇い、以降4年間にわたって生産的な協力関係が続いた。本作でもオジャースの写真とグレイマンのデザインが融合している ^{*1} 。 ^{*1} Margaret Timmers, <i>A Century of Olympic Posters</i> , London: V&A Publishing, 2008, 102; Steven Heller, "Jayme Odgers: Present and Past," <i>Print</i> , posted November 10, 2015, https://www.printmag.com/post/jayme-odgers .			
1983-228	デイヴィッド・ホックニー David Hockney	《1984年ロサンゼルスオリンピック競技大会》 <i>Los Angeles 1984 Olympic Games</i>	オフセット・紙 offset on paper	91.5 x 61.5	1982年
		本作でホックニーは、ミュンヘン大会のポスターと同様をスイミングプールを扱っているが、80年代に制作に導入した写真を用いている ^{*1} 。作家はサラエボ大会でも写真を用いたコラージュ作品《スケーター》でアートポスター企画に参加している ^{*2} （当館未取蔵）。 ^{*1} Margaret Timmers, <i>A Century of Olympic Posters</i> , London: V&A Publishing, 2008, 102. ^{*2} "Original poster David Hockney 'Skater' - XIV Olympic Winter Games, Sarajevo," Visconti Fine Art, accessed January 15, 2021, https://viscontifineart.com/buyart/original-poster-david-hockney-skater-xvi-olympic-winter-games-sarajevo .			

取蔵番号	作家名	作品名	技法	サイズ(cm)	刊行年
1983-229	ロイ・リクテンスタイン Roy Lichtenstein	《1984年ロサンゼルスオリンピック競技大会》 <i>Los Angeles 1984 Olympic Games</i>	オフセット・紙 offset on paper	91.5 x 61.5	1982年
<p>1923年アメリカ、ニューヨーク出身の画家、版画家、彫刻家。アート・ステューデンツ・リーグとオハイオ州立大学で学ぶ。50年代は当時主流であった抽象表現主義に傾倒していたが、次第に商業デザイン的な表現に転換。61年にコミックの一場面を引用し、一躍ポップアートを代表する作家となる。その後、コミックだけではなく名画を再解釈したシリーズや、ブラッシュストローク（筆致）を主題としたシリーズを手がける。1997年没。本作では、イタリア未来派の画家カルロ・カッラの絵画作品（1913年）を再解釈した《赤い馬乗り》（74年）というキュビズム的な作品を原画にしている*¹。</p> <p>*¹ Margaret Timmers, <i>A Century of Olympic Posters</i>, London: V&A Publishing, 2008, 102–103.</p>					
1983-230	マーティン・パーイヤー Martin Puryear	《1984年ロサンゼルスオリンピック競技大会》 <i>Los Angeles 1984 Olympic Games</i>	オフセット・紙 offset on paper	61.5 x 91.5	1982年
<p>1941年アメリカ、ワシントンD.C.出身の彫刻家。幼少期よりギターや家具作りを学ぶ。アメリカ・カトリック大学（ワシントンD.C.）で生物学を学び始めるが、芸術に転向。1964–66年、平和部隊としてシエラレオネ共和国（西アフリカ）に赴き、語学、生物学、芸術を教える。67年からはスウェーデン王立美術院（ストックホルム）で2年間版画を学ぶ傍ら、彫刻プロジェクトに参加。アメリカ帰国後、71年にイェール大学で修士号を取得。ミニマリストの美学に影響を受けながらも、アフリカや北欧の滞在中に吸収した桶造りや船造りといった伝統的な木工技術を融合し、70年代中頃から大規模な屋外彫刻を制作し始める。89年にはサンパウロピエンナーレで大賞を受賞。00年代に至るまで公共彫刻などを多数制作。本作では、上空から捉えたロサンゼルス大都市圏を背景に、洞窟壁画のようなプリミティヴな造形で、聖火を持って走るランナーが描かれている*¹。</p> <p>*¹ Karen R. Goddy and Georgia L. Freedman-Harvey, eds., <i>Art and Sport: Images to Herald the Olympic Games</i>, Los Angeles: Amateur Athletic Foundation of Los Angeles, 1992, 40.</p>					
1983-231	ロバート・ラウシェンバーグ Robert Rauschenberg	《1984年ロサンゼルスオリンピック競技大会》 <i>Los Angeles 1984 Olympic Games</i>	オフセット・紙 offset on paper	61.5 x 91.5	1982年
<p>1925年アメリカ、テキサス州出身の画家、版画家、彫刻家、パフォーマンスアーティスト。1953年から様々なオブジェをそのまま絵画の要素として取り込んだ「コンバイン・ペインティング」の制作を開始、注目を集める。ジャスパー・ジョーンズらとともにポップアートの先駆者として、60年代以降の美術に大きな影響を与えた。2008年没。本作では、グラフィックデザイナー、ロバート・マイルズ・ラニアンによるロサンゼルス大会の公式エンブレム「スター・イン・モーション」を枠組みとして、スポーツを含むあらゆる事象を写すイメージをコラージュしている*¹。</p> <p>*¹ Margaret Timmers, <i>A Century of Olympic Posters</i>, London: V&A Publishing, 2008, 103.</p>					
1983-232	レイモンド・ソーンドース Raymond Saunders	《1984年ロサンゼルスオリンピック競技大会》 <i>Los Angeles 1984 Olympic Games</i>	オフセット・紙 offset on paper	91.5 x 61.5	1982年
<p>1934年アメリカ、ペンシルベニア州ピッツバーグ出身の画家。ペンシルベニア美術アカデミー、カーネギー工科大学、カリフォルニア美術大学などで学ぶ。コラージュ、ミクストメディア（複数の媒体や素材の混用）を多用し、コラージュされたテキストにアフリカ系アメリカ人としての出自といった政治性や社会性を感じさせる作風で知られる*¹。67年には、「Black is a color（黒は色彩である）」と表明、本作でも黒は背景として全面的に使用されている。</p> <p>*¹ “Raymond Saunders,” Hammer Museum, accessed January 15, 2021, https://hammer.ucla.edu/now-dig-this/artists/raymond-saunders.</p>					

取蔵番号	作家名	作品名	技法	サイズ(cm)	刊行年
1983-233	ゲイリー・ウィノグラッド Garry Winogrand	《1984年ロサンゼルスオリンピック競技大会》 <i>Los Angeles 1984 Olympic Games</i>	オフセット・紙 offset on paper	61.5 x 91.5	1982年
<p>1928年アメリカ、ニューヨーク出身の写真家。ニューヨーク市立大学シティカレッジ、コロンビア大学、社会研究新学校（ニューヨーク）で絵画や写真を学び、50年代から報道写真、広告写真の分野で活動を始める。やがて、アメリカの街並みや日常生活を題材に、広角レンズを用いて対象を至近距離から撮影したストリート写真によって評価される。66年ジョージ・イーストマン・ハウス写真美術館のグループ展「社会的風景に向って」、67年ニューヨーク近代美術館「ニュー・ドキュメンツ」展に参加。1984年没。本作では、「世界で一番太い腕を持つ男」として知られた重量挙げ選手、ボディビルダーのビル・ペティスを写している^{*1}。</p> <p>^{*1} “The Rise and Fall of Bill Pettis, the Man With the ‘Biggest Arms in the World,’” <i>Los Angeles Magazine</i>, posted May 12, 2015, https://www.lamag.com/longform/rise-fall-bill-pettis-man-biggest-arms-world/.</p>					